

第1回 中世における寺院の役割

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

益田には時宗萬福寺・臨済宗医光寺・曹洞宗妙義寺といった中世(平安時代末から安土桃山時代まで)以来の寺院が複数残っています。これらの寺院は、七尾城跡・三宅御土居跡をはじめとする遺跡同様に、中世益田の様子を現在に伝えてくれるものです。

これらの寺院は益田氏が創建したり、保護したりしていましたが、益田氏が益田の地を去った後も、地域の人々の崇敬を集め、大事にされていたからこそ、現在に残っています。中世の人々にとって寺院とはどのようなものだったのでしょうか。

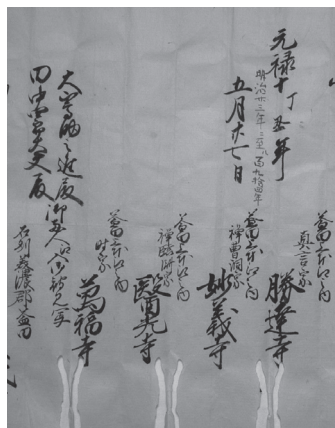
まず当然のことながら、宗教施設として人々の菩提(死後の冥福)を弔う場所であり、一族にとってのそのような寺を氏寺または菩提寺と言い、有力者は個人で菩提寺を持つこともありました。

また、仏教の知識は、中国や朝鮮からもたらされたこともあり、当時の僧侶には中国や朝鮮の最先端の知識を持つ者が多くいました。そしてその知識は権力者や地域にとつて貴重なものでした。

たとえば中国の文学に通じた者

は、中国との外交文書の起草(作成)に重宝されましたし、すぐれた土木技術を知る者は材木の伐りだしや治水に活躍しました。後者では、鎌倉時代に東大寺大仏殿再建のために、山口県の徳地からの材木伐りだしに活躍した重源という僧侶が有名です。

権力者はこのような優れた知識と技術を持つ僧侶を、精力的に招こうとしました。益田に中世以来の寺院が多く残っていることは、益田氏のそうした姿勢や、それを支える豊かな経済力があつたことを示しています。



▶ 「妙義寺文書」より萬福寺等連署書上控(一部)。元禄十(一六九七)年に勝達寺・妙義寺・医光寺・萬福寺の四ヶ寺が連名で寺領を浜田藩に報告したもので、中世以前の創建であることも記しています。

第二回 時宗 萬福寺

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

萬福寺は南北朝時代の応安七(一二三四)年十一月に創建されました。このときの大檀那(出資者)が浄阿弥陀仏こと益田兼見であったことを伝える棟札や、田畠を寄進するという兼見の文書が現在も残っています。当時の武士の多くは室町幕府が手厚く保護した禅宗、特に臨済宗を信仰していました。兼見も臨済宗の崇観寺(医光寺の前身)を重視し、祥兼という禅宗の法名(出家後の名前)を持っていました。時宗も深く信仰していたことが兼見の特徴です。浄阿弥陀仏または浄阿は、兼見の時宗の法名です。

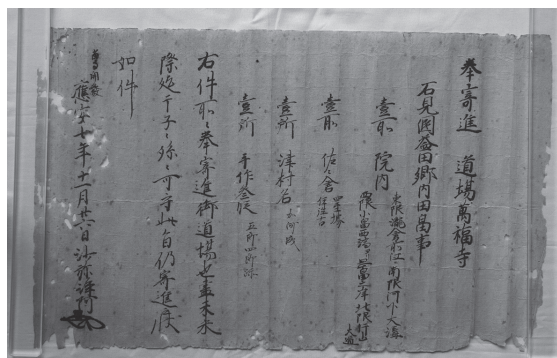
兼見は永徳三(一三八二)年に定めた置文(家訓)の中で、「道場」(萬福寺)を「本道場」にしたこと、益田家は子孫に至るまで萬福寺を大切にし、退転(衰退)させるようなことがあってはならないとしています。道場とは時宗の寺院のことであり、「本道場」とは、時宗寺院の中でも格の高い寺院のことだと思われます。

この兼見の置文もあつてか、益田氏は代々萬福寺を保護したようで、戦国時代に尹兼や藤兼が寺領や末寺を保護した文書が現在も残っています。

さらに天正十四(一五八六)年には、隠居した父藤兼の後見を得て、益田元祥が萬福寺本堂の修復を行っており、そのときの棟札も残っています。

こうした益田氏の厚い保護を受けた萬福寺は、仙道に莊嚴寺、上吉田に光嚴寺、その他にも一之寮・宝珠庵(または宝射庵)・西向庵といった末寺・脇寺などがあつたことが知られ、大寺院であつたようです。

そうした萬福寺の歴史は、鎌倉時代の様式を現在に伝える本堂(国指定重要文化財)や、雪舟が築いたと伝わる庭園(国指定史跡及び名勝)からも感じることができま



「萬福寺文書」より浄阿(益田兼見)寄進状。

萬福寺の創建にあたり、田畠を寄進しています。

第三回 臨濟宗 崇観寺 (医光寺)・東光寺

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

鎌倉幕府や室町幕府は、禪宗、特に臨濟宗を重視しました。その際、寺院の序列化をはかり、五山・十刹・諸山といった寺の格を作りました。諸山までは幕府が特に重要と認めた寺院で、寺領が保護され、住職も幕府が任命しました。

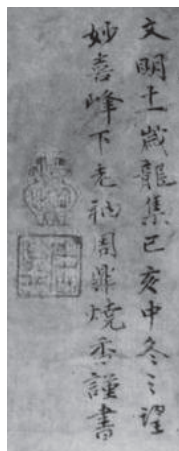
中世益田には諸山として、崇観寺がありました。崇観寺は、龍門土源を開山(初代住職)として招き、斎藤長者の妻が開基(出資者)となつて開かれたと伝わっています。永徳三(二三八三)年に益田兼見は、崇観寺を諸山にするために奔走したと置文(家訓)に記しています。崇観寺は十六世紀初め頃までに、なんらかの理由で衰退しましたが、事実上の後身として医光寺があります。

医光寺は崇観寺に隣接する脇寺であつたと推測されており、前述の兼見の置文にも記されています。益田宗兼がこの医光寺を大切にし、崇観寺に代わつて信仰を集めました。崇観寺と医光寺の連続性を示すものとして、医光寺の釈迦如来坐像があります。近年の調査でその胎内から、崇観寺仏殿の本尊として益田兼見が大檀那(出資者)となつて応安四(一三七二)年に製作したという墨書が発見されました。

同じく、諸山であつたと考えられるのが、大喜庵の前身とされる東光寺です。東光寺は山寺とも呼ばれ、益田兼見の置文には「山寺」が見えます。開山は石窓長珉です。室町中期には住職を幕府が任命していることから、諸山となつていたと思われます。

文明六(一四七四)年に仏殿が被災した際には、その復興費用の勧進(寄附)を募る文書を堺(大阪府堺市)の海会寺の季弘大叔が書いており、重要な寺院と広く認識されていたことがわかります。

雪舟が描いた重要文化財の益田兼堯像(益田市所蔵)の上部にある賛(描かれた人を讃える文章)は東光寺の住職竹心周鼎によるものです。優れた禅僧らのネットワークの中で、雪舟も益田を訪れたのだと思われます。



▶ 重要文化財「益田兼堯像」の賛の最後の部分。文明十一(一四七九)年の「中冬之望(十一月十五日)に妙喜峰(東光寺)の周鼎が書いたとあり、周鼎の朱印が二つ捺してあります。

第四回 曹洞宗 妙義寺

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

江戸時代の寛文二（一六六二）年に、当時の妙義寺住職盤撮は長門国深川（山口県長門市）の大寧寺に對してその由緒を報告しています。

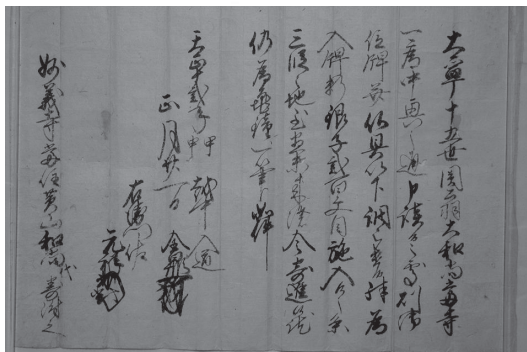
それによると妙義寺は、秀兼（益田兼家のこと）が木叟和尚を開山（初代住職）に招き建立したと記されています。益田兼家は十五世紀前半頃の益田氏当主ですので、妙義寺はその頃に創建されたと考えられます。応永三十（一四二三）年に兼家が寄進した寺領の注文（目録）の写と思われるものが「妙義寺文書」に残っています。

その後も、文安三（一四四六）年に益田氏家臣の下兼成が寺領を寄進したり、永正元（一五〇四）年には益田宗兼が境内にあった武門守護の神である軍八頭惣社大明神の祭礼を怠らないよう伝えたりするなど、妙義寺は益田における重要な宗教的中核の一つとして信仰を集めていました。

しかし、妙義寺が大きく興隆したのは戦国時代の益田藤兼の頃と考えられます。藤兼は、大義女・昌月女・崇寿女（妻や一族の女性の法名と思われる）の菩提（冥福）を弔うために、度々寺領を寄進しました。

さらに天正九（一五八一）年には、大寧寺の住職関翁殊門と、妙義寺の住職殊梅、子の元祥との四人連名で妙義寺の法度（規則）を制定しました。この時、妙義寺には、波田・澄川・都茂・丸茂などに十五の末寺があると記されています。関翁殊門は天正十二年に妙義寺の中興の開山として招かれます。

大内義隆が自害したことでも有名な大寧寺は、中国地方における曹洞宗の中心的な寺院でした。妙義寺と大寧寺に強い結びつきを作ることと、藤兼は妙義寺の興隆を願ったのでした。



「妙義寺文書」より全鼎（益田藤兼）・益田元祥連署寄進状。妙義寺の中興の開山として、関翁殊門を招き、銀子と寺領を寄進すると記しています。

この連載の第一回の写真の個所で紹介した、元禄十（一六九七）年に中世以前の創建であることをはまだはん濱田藩に報告している四ヶ寺のうち、唯一現存していないのが真言宗勝達寺です。

勝達寺は、染羽天石勝神社の別当寺として、同社左手後方の高台にあったとされます。別当寺とは、神社を管理するために置かれた寺のことです。

なぜ神社の管理を寺がしていたのでしょうか。中世では、神道の神様を仏教の仏様が権に現した姿（権現）と考え、神道と仏教を一体的にとらえる神仏習合という考え方が一般的であり、神社と寺院が近い関係にあったためです。染羽天石勝神社も当時は瀧蔵権現と呼ばれていました。

勝達寺は承平元（九三二）年に京都から浄蔵大徳が来て創建したと伝わり、全盛期には十六坊の末寺を構えたといひ、櫛代賀姫神社（当時は、境内にあった浜八幡の名称で呼ばれることが多かった）の別当寺真如坊も勝達寺の末寺であったといひます。

注目されることとして、勝達寺は文明三（一四七一）年に益田氏の

代官として周防国吉敷郡恒富（山口市黒川）の支配を担当しています。勝達寺がかなりの組織を持っていたことを示しています。

このように栄えていた勝達寺がなぜ現存していないのでしょうか。それは明治初年の廃仏毀釈によるものです。明治新政府には神道を国教化しようとする動きがあり、そのために神道から外来の仏教を分離させようとした。甚だしい場合には、仏教を排斥する運動となりました。これにより勝達寺のような別当寺は長く一体であった神社から分離され、経営基盤を失い、廃絶した寺院も少なくありません。廃仏毀釈は日本の、そして益田の宗教文化に大きな影響を与えたのでした。



鎌倉の極楽寺の木造不動明王坐像。もとは勝達寺の仏像でしたが、大正五（一九一六）年に移されました。